

特別講演 2

「肺非結核性抗酸菌症の現状と今後の展望」

福岡大学医学部 呼吸器内科学教授

藤田 昌樹 先生

抗酸菌は、マイコバクテリウム属に属する細菌の別称である。結核菌群以外の培養可能な抗酸菌による感染症を非結核性抗酸菌症（Non-tuberculous mycobacteriosis; NTM）と呼称する。特に肺結核と鑑別が必要な慢性呼吸器感染症、肺非結核性抗酸菌症を呈する症例が多い。頻度的には *Mycobacterium avium-intracellulare* (MAC)症が多く、*M. abscessus* 症、*M. kansasii* 症が続く。最近増加傾向であり、難治性も相まって注目を集めている。最新の統計では、非結核性抗酸菌症死亡者数は、結核死亡者数を追い越した。肺非結核性抗酸菌症、特に MAC 症を中心に現状と今後の展望について講演を行う。

肺 MAC 症は、特に患者数が急増している。治療の進歩が求められる呼吸器感染症の一つだが、肺 MAC 症の臨床はいまだ不明な部分が多い。結核菌と異なり、本症は環境常在菌により発症する疾患であり、どういう個体に感染するのか、なぜ感染するのか不明である。また、緩徐な進行を示す症例が多いが、その中に急速に悪化するグループが存在する事が知られている。菌側因子が問題なのか、個体感受性が問題なのか、議論が絶えない。治療を行っても完治する訳ではなく、高頻度に再燃することが知られている。また、治療時の菌が必ずしも再発するのではなく、新たな菌が再感染することも多いことが明らかになっている。どのような治療を、どのような症例を対象にして、いつから、いつまで治療をするのか、難しい問題である。聴講いただく先生方とディスカッションしていきたい。また、治療導入しても抵抗性を示す難治性肺 MAC 症に対する治療についても触れていきたい。